

平成30年度 佐賀県立金立特別支援学校 学校評価結果

1 学校教育目標 ○ 児童生徒の一人一人の状況(障害の状態や発達段階、特性)に応じた教育を実践する。 ○ 児童生徒が「明るく」「正しく」「たくましく」生きていく力を育成する。	2 本年度の重点目標 (1)個に応じた教育の実現を図り、生きる力を育む。 (2)児童生徒の進路指導に努め、卒後の自立と社会参加を目指す。 (3)健康・安全教育の充実を図ると共に思いやりの心を育て、豊かな人間性を育む。
--	--

達成度
A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む。

3 目標・評価

(1) 個に応じた教育の実現を図り、生きる力を育む。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌
教育活動	●教職員の専門性の向上	①個別の指導計画に基づく指導の充実 ②小中高一貫した自立活動の充実 ③職員研修の充実 ④職員の授業実践研究	①個々の児童生徒に応じた適切で具体的な目標と手だてを設定し、指導内容の充実を図る。 ②自立活動について、各職員毎の知識や理解を深める。 ③時機を得た研修内容を設定することで、研修に対する意識の向上を図る。 ④児童生徒の自立と社会参加に向けた資質・能力を育む指導・支援の在り方を探求する授業実践や事例研究を個人研究の形態で行うことにより、職員一人一人の指導力の向上を図る。	①個別の指導計画に基づいて実践・評価し、ケース会等で改善に取り組む。また、その評価を保護者に通知表等で伝える。 ②経験に応じた研修会を設定することで研修項目を増やし、職員研修の機会を充実させる。 ③校務分掌を中心に、実際の授業場面において、授業者に対し具体的な助言や支援を行う。 ④実践力を高めるために、研修内容に講義だけでなく実技に関する演習等を取り入れる。 ⑤各教職員が一年を通して個人のテーマ等を基に研究を行い、その成果と課題を所属する研究グループ内で報告し合う形を設定する。報告会後、全職員分の研究内容を収集し、ライブラリーの活用を目指す。	A	①学校の教育評価システムに沿ってグループ会、ケース会で共通理解しながら行うことができた。 ②経験年数に応じた研修コースを設定し、よりニーズに応じた研修を行うことができた。 ③校内巡視の機会が少なく、実践的な場面での意見交換ができなかった。 ④各関係分掌と連携して、職員に必要な基礎的内容の周知定着になる研修はできた。ただ、日々の業務の効率化と働き方改革を実践するためにも、本当に欠かせない研修に絞って行う必要がある。 ⑤職員一人一人が主体的に日々の課題に向き合い実践を行うことで、児童生徒の成長に直接結びつく実践ができた。次年度は、研究テーマを時勢に合わせ設定して行う必要がある。	①評価については、ケース会のみでなく授業毎単元毎でも行い、評価改善の質を高めたい。また様式等の変更をする場合も共通理解をしながら改訂を行う。 ②研修会においては、アンケート等により職員のニーズを適切に取り入れるとともに、研修会以外での情報提供の手段を検討する。 ③校内巡視機会を増やすとともに、授業時間以外にも明確な相談機会を設定し、意見交換を充実させる。 ④管理職と相談の上、研修内容の精選を行い、計画的に実施し効率化を図る。 ⑤学習指導要領の改訂を踏まえ反映した研究テーマを設定し、校内研究を進める。	教務部 自立活動 研修研究
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT 利活用教育の実施	①支援機器や学習用PC、電子黒板等を利用した学習支援研修の充実 ②情報モラル教育の実践	①教職員のニーズに即したICT機器の選択と利活用研修を実施する。 ②児童生徒の実態や発達段階に応じた情報モラル教育の充実を図る。	①ICT機器の利活用に関する研修会を実施し、教師のニーズに即したICT機器の選択に努める。 ②家庭におけるインターネット等の使用においては、家庭や関係機関と連携を図り、指導を行う。	B	①重複障害学級の児童生徒に学習用PCの使用を希望する職員に対して、入力装置の工夫について研修を行い利活用を促進できた。 ②児童生徒の発達段階に応じた情報端末使用に関する教職員研修を実施した。	①一部で使用が開始されている視認入力による情報端末の使用を、学期間で連携して使用可能な体制を整える。 ②児童生徒に加えて保護者と共に学びあえる情報モラル教育に取り組みたい。	学習情報

(2) 児童生徒の進路指導に努め、卒後の自立と社会参加を目指す。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌
教育活動	●進路指導	①将来の自立と社会参加を意識した指導の充実 ②学校、家庭、関係機関が協働して進めるキャリア教育の推進	①各学部・学年に応じた進路支援に対する教職員の意識を高め、将来を見通した指導に努める。 ②学校、家庭、関係機関との一層の連携を推進し、キャリア教育の取組について共通理解を図る。	①研修を行うとともに、進路指導に特化して資料を集約し、活用できるようにする。 ①新転任者の職場体験研修を実施し意識を高めるとともに、職場開拓につなげる ②学校だよりやホームページなどでの情報発信を行う。	B	①特別支援学校での進路指導経験が少ない職員や保護者が分かりやすいように情報を精選して資料を作成し、研修会等でも同様の配慮をした。 ②ホームページでの情報を更新しなかった。計画的に取り組む必要がある。	・高等部入学以降に行う進路相談は個別に具体的な内容となるので、この時に必要な情報を職員や保護者に提供することを今後も継続する。また、研修についても今年度同様の配慮を継続する。	進路指導
教育活動	○地域との連携	①交流及び共同学習の推進 ②学校情報の公開	①交流及び共同学習を積極的に進めていくことで、地域の方々との触れ合いの機会を増やし、将来の地域生活の基盤を培う。 ②学校だよりやホームページにより、学校情報の積極的な公開を図る。	①正しい理解の促進を図るために、交流及び共同学習の授業を実施する前に、相手校に対して十分な情報提供を行う。また、これまでの交流記録や新聞掲載記事等の資料を活用し、より連携を深める。 ①地域の活動など、機会をとらえて積極的に参加する。 ②行事の報告や行事予定などの情報を、速やかに公開し、地域との連携を深める。	B	①相手校と十分な打合せを行い充実した交流の内容になっている。実施日以外にも手紙や年賀状のやり取りなど継続の成果を感じる。 ②年間5回の学校だより発行や年間2回の各学級の活動紹介をホームページ更新を行い、学校情報の積極的な公開を図ることができた。	①今後も連携を密にとりながら、交流及び共同学習のさらなる継続をしていく。 ②自立活動部からの教材教具や自立活動に関する情報発信を進める取り組みを考えたい。	教務 学習情報

(3) 健康・安全教育の充実を図ると共に思いやりの心を育て、豊かな人間性を育む。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌
学校運営	○安全な教育環境の構築	①危機管理体制の整備 ②職員研修の充実	①危機事象への対応手順の周知徹底と定着を図る。 ②危機事象に対する意識の向上を図る。	①危機管理マニュアルを見直すと共に避難訓練等を実施し、対応手順の確認を行う。また、感染症対策についても対応手順に沿って迅速に対応し、感染拡大を防ぐ。 ②実際に対応できる力を育成するために、研修は講義だけでなく実技を取り入れることで理解を深める。	A	①危機管理マニュアルの再構築し、各種緊急事態に対処した訓練を実施することができた。 ①手洗い石鹸液、アルコール消毒液、嘔吐物処理セット等を各所に配置し、対応マニュアルを提示した。インフルエンザについては、校内規定を設け、罹患による出席停止や別室対応等の対策を講じている。 ①インフルエンザ感染拡大防止にはサービス事業所の情報が必要である。 ②避難時の危機管理として災害対応食品を準備し、実際に給食として実食し児童生徒はもとより職員の意識の向上を図ることができた。 ③新転任教職員にしばって感染症予防研修を実施し、手洗い演習を組み入れたことで、理解を深めることができた。また、本校職員が演技するビデオを研修に使用することで、関心を高めることができた。	①事業所での罹患情報が、保護者から学校に届くようなシステムにするなど、感染拡大の危険因子を減らす対応が必要である。 ①避難時の場所の確保や誘導に対して訓練を通して職員間の共通理解への取り組みとして、できるだけ問題解決をして次に取り組む。 ②災害食を準備しているため、今後も訓練時に実際に試食する時間を設定し、その問題点を見つけ改善する。	生徒指導 保健
教育活動	●いじめの問題への対応	①いじめの防止と早期発見	①保護者や関係機関との連携を図り、早期からの発見に努める。 ①多様なケースに対応できる校内の相談体制をつくる。 ①児童生徒会活動の充実を図る。	①いじめアンケートを各学部で実施し、学校生活での実態を把握し、情報を共有する。 ①教職員の意識の向上を図るために、いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、いじめの防止に取り組む。 ①児童生徒会の活動目標等に関連項目を盛り込む。	A	①年に2回保護者と児童生徒にアンケート実施で実態が把握できた。 ②まずは毎月の聞き取りによるいじめ調査で、児童生徒と担任の信頼関係がつけられた。 ③児童生徒会が各学部に応じた月目標を決めて落ち着いた学校生活を送ることができた。	①今後もアンケートを実施し、児童生徒と保護者との信頼関係を築く。 ②学部によっては、児童生徒の転出入の多い学部もあるので注意喚起が必要。 ③児童生徒会が自ら率先して活動できるような雰囲気や状況に取り組む。	生徒指導

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	担当分掌
学校運営	●地域支援	①特別支援教育のセンター的機能の充実	①地域の学校で特別支援教育を担っている教職員に対して相談支援に努める。	①特別支援教育コーディネーターを5名配置し、要請に基づき派遣し相談支援を行う。また、必要に応じて専門性のある教職員も同行し、支援に当たる。 ②支援や相談等に関する情報収集及び情報提供を行う。	B	①地域の幼保、小中学校、高等学校からの要請を受けて、巡回相談を行った。特に肢体不自由や病弱虚弱のある幼児、児童生徒に関しては、自立活動部等の協力を得て、支援に当たることができた。 ②上記の他、学校見学や電話相談等による情報提供も行った。	・特別支援教育コーディネーターを5名配置しているものの5名中3名は担任を兼ねており、巡回相談に行くことが難しく、経験が重ならない。校内での役割を見直しつつ、特別支援教育コーディネーターの専門性の向上を図り、経験を積んでいくことが今後の課題になっていくと考える。	相談支援
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	①教職員の連携促進 ②業務効率化の推進	①学校運営を組織的に行い、業務の効率化と分散化を図り、業務の内容の質を維持しながら、個人の過重な負担を防止する。 ②情報・データの共有化を図る。	①運営委員会・学部主事会等で学期間・分掌部間の連携を強化しながら、組織の連携・協力体制を構築する。 ②共有フォルダを利用し、様式、業務データ、情報等の共有化を行い、効率的な業務遂行に努める。	B	①運営委員会・学部主事会等で学校行事や研修会等の打ち合わせを密に行い、連携・協力しながら実施することで、業務量の均質化を図ることができた。 ②共有化を進め、業務の一定の効率化を図ることができた。共有フォルダの周知徹底が必要である。	①業務内容の縮減・効率化をさらに進めるために、職員一人一人が働き方改革の意義を理解し、主体的に働き方改革に取り組む必要がある。 ②共有フォルダの内容をより充実させ、朝礼等で共有フォルダの内容を紹介したり利用を推奨したりする必要がある。	管理職

4 本年度のまとめ・次年度の取組

教職員の専門性の向上のために、本年度より職員一人一人の課題に応じた個人研究に取り組むことになった。担当する児童生徒一人一人の教育的ニーズに配慮しながら行う個人研究は、ある意味では効率的・効果的な校内研究であった。研究のための研究ではなく、目の前の子どもの教育実践をより充実させるための研究であったため、何よりも職員一人一人が主体的に取り組む、子どもと向き合う時間を大切にすることができた。また、校内研修も全ての職員が同じ研修を画一的に受けるのではなく、経験年数に応じた研修を企画し、自分の能力に応じた研修を選択して受けることができるよう工夫している。そのため、職員の研修・研究に取り組む姿勢も積極的である。来年度も、新学習指導要領の改訂を踏まえた全体の研究テーマを設定しながらも、今年度と同様の研究体制のもとで専門性の向上を図りたいと考えている。
職員の危機管理意識も高まってきている。避難訓練や水難事故の際の訓練等にも真剣に取り組んでいる。職員一人一人が常に危機管理意識をもち、安全・安心な教育環境を提供できるよう、今後も危機管理に関する訓練や研修に取り組んでいきたい。
年度末に実施した保護者アンケートでは、全体評価において、学校や職員への信頼に関する項目で高評価を得ることができた。次年度においても、全教職員が自己研鑽の姿勢を忘れず、保護者および地域から信頼される学校づくりを目指し取り組んでいきたい。

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目